

■調査目的

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【結果について】**■概要**

今回調査のあった国語では、すべての項目で全国平均を下回りました。数学でも、ほとんどの問題で正答率が全国平均を下回りました。この2つの教科において無回答率が例年に比べ高く、難しいと感じた問題に取り組めない生徒が多いことがわかりました。理科では全国平均と比べて基礎的な項目での正答率は低かったものの、難問にあたる問いに対して正答率が高いことがわかりました。

また、生徒質問紙からは、生活習慣や規範意識については昨年度同様、高い傾向にあることがわかりました。また、「学校が楽しいか」「先生は丁寧に教えてくれるか」などの教師に対する質問はどれも、全国よりも肯定的な意見が高いことがわかりました。各教科の「得意ですか」という問いに対しては、昨年度より肯定的な意見が減少しています。

■強み・弱み**①各教科**

国語では、授業に対する意欲が高く、生徒同士で意見を交流し合いながら、自分の考えを深める姿が見られます。授業の規律も整っており、落ち着いた学習環境が保たれています。今後は語彙力をさらに高め、文章内容の理解を深めることで、学力の向上が期待されます。一方で、家庭学習の習慣が十分に定着しておらず、復習が行われていないことが、学習内容の定着を妨げる要因となっています。数学では、数と式などの基本的な計算力は身についており、文章量の多い問題にも一定の成果が見られます。特に「確率」や「関数」では全国平均に近い正答率を示しました。ただし、無回答率が高い問題も多く、時間配分や問題への取り組み方に課題があると考えられます。また、図形やグラフの読み取りといった単元に苦手意識が強く、特にグラフの傾向を読み取る問題では無回答率が全国平均を大きく上回りました。数学的な思考力を育てるためには、1年生の内容からの復習が必要です。理科では、難易度の高い問題に対しても全国・県平均を上回る正答率を示すなど、思考力を要する問題への対応力が見られます。記述式問題の正答率も比較的高く、表現力も育ってきています。一方で、比較的易しい問題の正答率が低い傾向があり、基礎的な知識の定着に課題があります。また、スコアが最も低い層の生徒の割合が大きいことも、今後の指導上の課題です。

②質問紙

本校の生徒は、生活習慣や規範意識、教員への質問姿勢など、多くの項目において滋賀県および全国の平均を上回る結果を示しています。また、学習への取り組みに関しても、必ずしも得意意識が高いわけではないものの、授業の内容やその活用、将来へのつながりについて肯定的に捉えている生徒が多く、学びに対する前向きな姿勢が育まれていることが本校の強みといえます。さらに、読書や新聞に対する関心も高く、情報収集や思考力の基盤が形成されている点も評価できます。一方で、「自分の考えを発表する」「授業の課題を自主的に解決する」といった主体的な学びに関する項目で、滋賀県および全国の平均を下回る結果となりました。また、平日の学習時間に関しては、「3時間以上学習している」と回答した生徒の割合が全国平均を上回る一方で、「全く学習していない」と回答した生徒の割合が滋賀県・全国の2倍以上にのぼっており、学習習慣の二極化が顕著に見られます。さらに、「人の役に立つ人間になりたいと思うか」という質問に対して、昨年度までは平均を上回っていたものの、今年度は平均を下回る結果となっており、社会貢献意識の低下も懸念されます。

■指導の充実に向けて】

- ①授業改善と指導力の向上を目指し、「学び合い学習」や「主体的・対話的で深い学び」、「読み解く力を育成する取組」を推進します。
- ②基礎学力の定着に向け、授業での「めあて」の提示と「振り返り」の実施を徹底します。
- ③個々に応じた家庭学習の充実をはかるため、適切な課題の設定を行います。
- ④アウトプットする機会を増やし、得意なことを伸ばすことで苦手な部分（特に基礎学力の向上）を補うように努める。
- ⑤様々な体験学習において、将来の生き方について考える機会をもち、たくましく生きる力を育みます。
- ⑥小学校との連携を充実させ、地域で系統立った学びの場を確保していきます。